

## 何が先端か？

館長 横川公子



思いがけないことに、当館の取組みが「先端的である」と評価された。

去る3月7日、瀬戸内海歴史民俗資料館の講演会「私たちの暮らしをモノから見る一民具と生活財の視点から一」の一環として、講演「中田静さんの残した生活財からわかること」を提案した。その時の講演依頼の理由と講評の第一声である。講演内容は、当館で10数年にわたって取り組んできた中田家資料に含まれた《粗品》の分析結果を紹介するものであった。いったい何が先端的と評価されたのか。ざっくりいえば、民具から生活財への調査対象の移行や視点の展開が評価されたようだ。また高度経済成長期に日本文化のアイデンティティを目指して、全国的に歴史民俗博物館(国公立)が開設された。その結果、収集された民具類が溢れるほど大量になり、昨今、廃棄が検討されるようになった。改めて民具収集の意義と活用が喫緊の課題にのぼっている。という中で、当館の生活財調査の取組みが浮上した。高度に発展した工業化の下で、改めて生活財が投げかけている我々の生活文化の在りようが、注目されるようになったのである。

日本では、博物館的な視座から《民》衆に注目するようになったのは、1926(昭和元)年に渋沢敬三が《民具》を提唱してからだといわれ、ほぼ同時期に柳田國男の《民俗》や柳宗悦《民芸》も注目できる。以来、今年101年目に当たる。歴史民俗博物館が各地にできてからでもほぼ半世紀がたち、民衆の生活を支えるモノとそれをつくる道具への関心は揺るぎないもののように見える。一方、生活財もまた、生活に役に立つモノすべてを示唆する用語である。1970年代にCDIという調査機関によって使われるようになり、その云いはほぼ民具と共通である。

民具調査が全国に視野を拡大しながら一点集中型調査を展開し、作り方やその技術の必然性を中心に歴史を構

築しようとする。それに対して生活財調査は、生活に関わる全てのものを視野に入れている点に相違がある。渋沢らとほぼ同じころに、今和次郎が《現在》を対象とする考古学つまり「考現学」を提唱し、部分的な悉皆調査で独特の分類と統計による記述を始めた。

生活に関する本格的な悉皆調査は、「2003年ソウルスタイル李さん一家のくらしー」(国立民族学博物館、以下みんなばくと称す)で、担当の佐藤浩司氏は1年間に亘る現地調査を実施し、ついには李家に泊まり込んで生活財のすべて、冷蔵庫の中身まで調べ尽くした。それらのモノはみんなばくでの展示後、収蔵品となっている。これと前後して、大村しげコレクション(みんなばく)の悉皆調査が実施され、これも収蔵されている。中田家資料の悉皆調査は、これに続く当館の企画である。

これらの調査は、モノとしての観察結果を把握するのみならず、使い方や入手から消費に関わる体験を探ることで、暮らしとの関係性が炙り出される。中田家資料では地域の生活者から、モノ(たとえば粗品)にかかわるライフヒストリーを発掘するまでになった。

しかし、各コレクションは、その時代と社会の一隅にある事例にすぎない。些末な、生きることに必ずしも必要不可欠ではないモノに、人々はこだわり関わっていくことが浮かび上がる。そこに現代人ひいては人間の本质があり、歴史が紡がれ、生活の美学が浮上する。よりよく生きる営みの意味を示唆することにより、モノ調査は未来に向かう生き方を確かにし、補強するのではなからうか。

以上、様々な追体験の可能性を示唆したつもりであるが、先端的なモノ調査に貢献するべく、さらに研鑽に励みたい。

1階ロビー  
2025年常設展示コーナー  
冬季企画  
「人、馬に騎る」



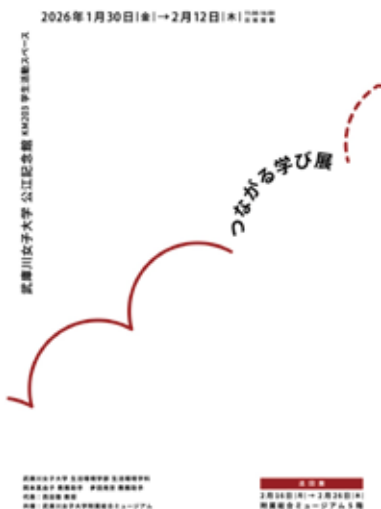
展示風景

本年は午年です。人間と馬との関わりは古く、馬は紀元前4000年頃に荷物運搬用として家畜化され、紀元前2000年頃のオリエントにおいて騎馬の習慣が始まりました。馬は四肢が長い歩幅も大きく、頸が長い重心を前に移動させやすい体の構造をしており、さらに背中を丸めずに走ることができるため、騎乗に適した動物でもあります。日本には古墳時代に大陸から伝わり、主に軍馬や貴人が移動する際に利用されたと言われていました。

今回の企画では、「馬」と「人」との関わりに焦点を当て、エキゾチックな雰囲気をもつ狩獵文の羽織や帯、男児に人気を博した武者絵や合戦図(歴史画)の着物図案や裂地、騎馬を武芸として発展させた馬術に関する資料を展示しました。また、阪神(鳴尾)競馬場の往時を偲ぶ写真もパネルで出陳しました。(平)

## 2件の公募展を開催しました

- ・つながる学び展
- ・知の森展



今年度附属総合ミュージアムでは、【公募展】と称して、「武庫川女子大学ではどのような教育研究体験を提供し、選ばれ続ける大学となっているか」を直観的に理解してもらうためのイノベーティブな展示の企画を本学教職員に公募しました。そして2件が採択され、このたび学術研究交流館（IR館）1階・5階にて展覧会を開催しました。



### ・つながる学び展

…生活環境学科が主催となり、生活環境学科が掲げる「領域横断的な学び」をテーマに、学科の多様な教育実践とその成果を紹介しました。1月30日からKM203にて展示・藍染ワークショップなどを開催し、その後2月16日からIR館5階に巡回しました。合計173名の熱心な来場者が訪れました

### ・知の森展

…本学教職員有志により、研究者一人ひとりの「専門性(木)」を深めながら、「総合性(森)」を捉える視点を大切に、分野を超えて知を循環させることで、社会に実装される研究・実践を生み出すことをめざして企画されました。総合大学である武庫川女子大学の魅力ある研究・プロジェクトを発信するとともに、学部学科を超えてアカデミックなつながりを作ることを目的とし、49名の研究テーマがパネルとして展示をされました。また2月19日(木)には活発な研究交流会が開催されました。



さがしてみよう!

# 武庫川ヒストリー vol.6

くわしくなろう!

Museum News no.14 に掲載した「武庫川ヒストリー vol.5」では、「モノクロパネル写真」をご紹介しました。この写真は、昭和 31 年 (1956) に本学の体育館が国民体育大会の体操競技会場となったときに昭和天皇・香淳皇后が行幸された際の写真です。貴賓席に座られている昭和天皇・皇后の存在感に、整列している学生たちもかなり緊張している様子が伝わってきます。



「モノクロパネル写真」(当館所蔵)

附属総合ミュージアムでは、学院のこれまでのあゆみに関する様々な資料を収集し、保存しています。学部学科や研究室などにある何気ない資料も、学院にとって重要な資料です。ぜひ、情報をお寄せください。

また、4月から開催する春季展では、様々な学院資料・学科史資料を展示いたします。展覧会の詳細は、次ページをご覧ください。

## デジタルアーカイブ推進事業を実施しました

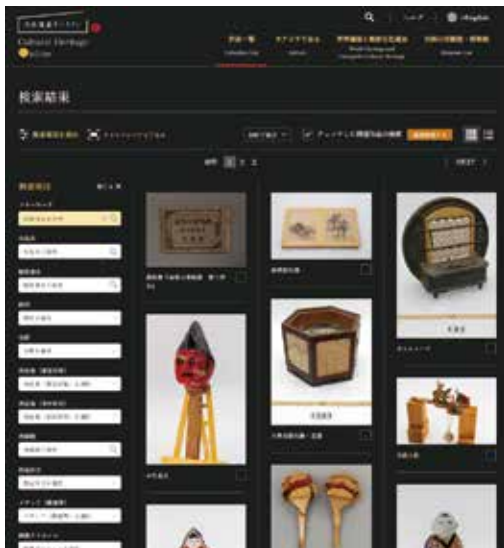


2025年9月、文化庁が Innovate MUSEUM 事業として実施する「博物館収蔵資料デジタルアーカイブ推進事業」に採択され、収蔵資料のデジタルアーカイブ化に向けた作業をすすめてきました。

当館の収蔵資料は、ミュージアム資料・学院資料をあわせて6万点以上あります。登録有形民俗文化財に登録されている「武庫川女子大学近代衣生活資料」を含むミュージアム資料は3万点を超え、学院のあゆみのなかで購入し、収蔵されてきた民具資料や、平成21年(2009)に寄贈された中田家資料などは、随時調査をすすめ、展覧会や研究に活用をしているものの、一般に公開するためのデジタルアーカイブ化はなかなか進んでいない状況がありました。このたびの採択を受け、すべての資料のデジタル化ができたわけではありませんが、民具資料・中田家資料ともにデジタルアーカイブ化を促進させるきっかけとなりました。今回調査をおこなった資料については、資料名などの英語翻訳もおこない、今後随時、当館 HP にある資料検索システムで検索できるようになるほか、文化遺産オンラインに登録をしていきます。事業は今年度末で終了するものの、デジタルアーカイブ化の作業は継続して実施し、当館の資料を広く活用してもらえるように発信をしていきたいと考えています。(並木)

(写真上) 民具資料の調査の様子

(写真下) 現在文化遺産オンラインにて公開されている当館の所蔵資料の様子



## 2026 年度春季展

# 「新制女子大学として抱いた夢と理想」を開催します

2026 年度の春季展は「新制女子大学として抱いた夢と理想」と題して、4 月 3 日（金）より開催いたします。

このたびの春季展では、学科史資料・学院資料の活用を目的とし、本学の原点として、新制女子大学の発足から昭和 40 年代頃までの歴史を対象とします。本学は、昭和 14 年（1939）に武庫川高等女学校として創設されました。その後、昭和 24 年（1949）に戦後の大学改革にのっとりた新制大学・武庫川学院女子大学として開学しました。新制女子大学としてスタートした最初期の女子大になります。

主な展示資料は、新制大学として開学した当初より設置されていた学芸学部国文学科・生活科学科（食物学専攻・被服学専攻）、および昭和 37 年設置の薬学部に関する資料と、当時の大学・短期大学の様子を物語る資料や、卒業生からの寄贈資料などです。これらの資料を概観することは、自分たちもその歴史に連なっていることを自覚し、さらにこれからの未来を展望することにもなります。

新制女子大学としてどのような夢や理想を抱いてきたのか、そして皆学化へと新たな舵を切った本学への期待を感じていただけるような展覧会にしたいと考えています。ぜひ足をお運びください。



会 期	2026 年 4 月 3 日（金）～ 6 月 3 日（金）
開館時間	平日 10：00～16：30
休 館 日	土曜・日曜・祝日 （ただし、5 月 24 日（日）は 10:00～15:00 開館）
入 館 料	無料
会 場	学術研究交流館【IR 館】5 階ギャラリー

学術研究交流館【IR 館】は M.I.C. カードでご入館いただけます。本学教職員・学生の方は、所定の場所にカードをかざしてご入館ください。一般の方は、玄関にあるインターフォンを押してください。

